

私は千葉県柏市で生活安全産業の一翼を担うべく、警備会社を展開する会社経営者です。ぜひ、新卒高校生の方々に当社の門をたたいて頂きたく、先生方、学校関係者の皆様に日頃から、経営者として思うこと、感じていることを綴ります。文化・芸能・教育・社会・経済・企業の問題を一緒に考えていきたいです。当紙の題名は私の人生訓であり、モットーでもあります。

## 夏の今昔、「見苦しきもの」、「をかし」に想うこと

平安の昔、清少納言は「枕草子」の中で世の中の「見苦しきもの(みっともないもの、不快なもの)」として「色黒の女性」「髭が伸びたやせ細った男性」などと容赦なく並べ立てました。もし彼女が現代の日本の夏にタイムスリップしてきたら、一体どんな章段を書き加えるでしょうか。おそらく、汗でシャツが肌に張り付き、駅のホームで団扇を激しく煽りながらスマホを睨みつけている中年サラリーマンの姿などは、格好のターゲットになるに違いありません。

昭和世代の私たちが子供の頃の夏といえば、エアコンがなくても風鈴の音やスイカ、打ち水でそれなりに涼をとれたものでしたが今やそんな風情は消え失せました。街を行く人々が携帯扇風機を首から下げ、かき氷屋の店外に行列をつくる姿は、それ自体が今の時代の「見苦しきもの」であり、同時に「いとをかし(非常に興味深い)」な光景なのかもしれません。

盛夏となればアスファルトからの照り返しはゆうに40度を超えます。警備服の中はさながらサウナ状態。彼らの姿は、お世辞にも「涼しげでスマート」には見えません。額から滝のように汗を流し、首元に冷却タオルを巻き、ファン付きの空調服をブーンと膨らませて仕事に励む姿を清少納言が見たら「いと見苦し」とバツサリ斬り捨てることでしょう。

しかし、その「見苦しき」の裏にある彼らのプロフェッショナリズムこそが、私は愛おしくてならないのです。私たちの仕事は決してAIが代替できません。汗をかき、埃にまみれて街の安全を守る。誰かがやらねばならないその仕事を、プライドを持って全うする彼らの背中、私にとって何よりも尊く美しいものです。

この過酷な夏を、仲間と共に「マケテタマルカ！」と笑い飛ばしながら乗り切る、そんな熱い生き方を求めて飛び込んでくれる若い力を、当社は心から待っています。学校の先生方、どうぞ第一線の現場で汗を流す若者の選択肢として、我が社の門を叩くよう背中を押していただければ幸いです。



毎号、「マケテタマルカ」をご精読いただきありがとうございます。  
これより、2027年3月卒生の採用活動を本格化してまいります。  
今年度も、東葉警備保障株式会社と当社の採用担当者どうぞよろしく願い申し上げます。

松本 隆一郎